

「鬼門」という言葉がある。鬼門とは家の中心から見て、艮(うしろ)の方角(東北)であり、「裏鬼門」とは、坤(ひつじさる)の方角(南西)のことをいう。いずれも忌み嫌われる方角とされている。鬼門の方角は家運断絶や子宝に恵まれない可能性が高くなると言われ、裏鬼門の方角は病弱や生活費浪費などの可能性が高まるとされ、いわゆる鬼門封じの対策を練る必要があると言われてきた。この鬼門封じの歴史はとも古く、平安時代には御所の鬼門の位置に比叡山延暦寺が建立され、また、江戸城の鬼門には神田明神が、裏鬼門には日枝神社がそれぞれ建立されたと言われている。上野の寛永寺も江戸城から見ると東北の位置にあるとされ、そこに徳川家の菩提寺である寛永寺が建立されたとも言われているが、江戸城から見て上野・寛永寺は東北の位置にぴったり合っているとは言えないかもしれない。

実は、鬼門とか裏鬼門との関連で「鬼門封じ」という考え方は雑誌などを通じて現代に生きる私たちの生活に深く浸透している。漫画や映

画で流行っていた陰陽師の話や風水学などからどの方角にどのようなものを置くのかという記事も雑誌の中で取り上げられることが多い。小松和彦先生という民俗学者がいて、大学時代、私は小松先生の書籍を何度も読み耽っていた。

さて、護国神社とは、国のために殉職した人の英霊を祀るための神社であり、明治維新を契機として全国各地に建立された招魂社が改称された神社である。国のために殉職した者を祀る靖国神社も、皇居の鬼門の位置にある上野に建てるべきだとの意見がかつてあったそうである。しかし、幕末における戊辰戦争の際、彰義隊が寛永寺に立てこもり、同所が戦場と化し、数多くの者の血が流れてしまったことから、血で穢された土地とされて、同所に靖国神社を建てるのが諦められたとの逸話もある。

ところが、日清戦争という国難に直面した明治政府は、皇居を中心として、この鬼門封じを活かしたいと考え、征韓論を唱えるなどして失脚した西郷隆盛の銅像をわざわざ

ざ上野公園に建立した。

この当時、地政学的にも海外に進出する必要性を痛感せざるを得なかったと思うが、その立ち位置は、武力をもつて朝鮮を開国させようとする征韓論という思想と合致したのである。だからこそ、西郷隆盛の銅像を建立し、実際に数多くの兵士が西郷隆盛の銅像の前にて整列して大陸に渡っていったのである。数多くの兵士の姿はいまでも古い写真などから見ることができ。

かなり以前から、我が国が「鬼門封じ」という思想をもつて、京都御所やお城を中心として、鬼門の方角や裏鬼門の方角に寺や神社を建立してきたということを思うと、とても考え深い。

北海道では、アイヌ文化を除いて古い歴史はないものの、北海道外の都市を訪れ、現存するお城や城跡を中心として、鬼門や裏鬼門とされる方角にどのような名称のお寺があり、それらがいつころ建立されたのかという点に思いを巡らせることはとても楽しいことである。逆に、城や城跡を中心として鬼門や裏鬼門の方角ではない方角に武家の菩提寺

などのお寺があれば、実はそのお寺が建立された頃にはお城が別なところにあったなどという新たな発見もあり、それこそが日本史の醍醐味だろうと思われる。

最後に、明治時代に竣工された開拓使本庁舎に鬼門封じがあったかどうかについて触れたい。

開拓使本庁舎は、現在の赤レンガの横にあったそうである。明治5年7月に着工し翌年10月に竣工している。しかし、この本庁舎建設に着手する以前の明治3年4月に現在の北区北4条東1丁目には開拓使仮庁舎が竣工されていた。他方、北海道神宮が現在の円山に遷宮されたのは明治4年9月14日であり、それ以前は、明治3年5月に北区北5条東1丁目の地に開拓神勅祭社があった。そうすると、開拓仮庁舎と開拓神勅祭社とはとても近い場所に建てられたが鬼門封じと特に意識したようでもない。また、開拓使本庁舎が竣工される前に北海道神宮が円山に遷宮されるが、開拓使本庁舎との位置関係において鬼門封じはなされなかったものと私は推察する。